

患者の心理に関する研究(2)

大学生におけるイメージと気持ちの評価について

佐藤 公代

(教育心理学教室)

(平成15年5月22日受理)

Study on Patient's Psychology (2)

Kimiyo SATOU

(問題と目的)

佐藤(2003)は、「患者の心理に関する研究(1) - 特発網膜剥離体験者として - 」において、患者の心理に関して、今まで言われていることに照らし合わせて、実証的な研究をする手がかりを得た。

今回は、入院や患者と聞いてのイメージや入院したときの気持ちについて、5段階評定をしてもらう。

仮説は次の通りである。

- (1) 入院、患者という言葉を知っているイメージは、入院経験の有無により違いがあらわれるだろう。
- (2) 入院経験者の方が、そして、女性の方がイメージ数が多いであろう。
- (3) 「認識+解決=すぐ実行」のタイプ者は、入院時に起こる一般的な気持ちをそれほどあらわさないであろう。

(方法)

- 1) 期日：2002年6月
- 2) 対象者：大学生167名(男子85名、女子82名)。表1に人数の内訳を示す。
- 3) 手続き：別紙のように、「入院、患者という言葉を知っているイメージ」、「入院の有無、入院の場合、何歳頃、どんな病気で、

表1 人数の内訳(人)

入院有無	男女		計
	男	女	
入院無し	52	57	109
入院有り	33	25	58
計	85	82	167

どのくらいの期間か」,そして、「その時の気持ちを(1)非常に否定的,(2)否定的,(3)どちらでもない,(4)肯定的,(5)非常に肯定的,の5段階評定とする」。さらに、「認識と解決との関係でみるタイプ」にも答えてもらう。

(結果と考察)

表2に入院についてのイメージを示す。

表2 入院についてのイメージ(括弧内は延べ人数)

入院無し	男	病気(12), 怪我, 事故(9), 安静(4), つらくて退屈(4), 病院(4), 痛い(3), 金かかる(3), 大変(3), 拘束, 不自由(2), 不安(2), 暗い(2), 手術(2), 嫌い(2), 重病(2), 働けない, 不利, 悪い, マイナス, 白, 苦しい, 死生, 未知の世界, 寂しい, 病人, 閉鎖的, 急患, ずっと寝ているそう, 医者, 弱っている, 暇, 看護婦, 保険, ベッド, ごはんまずい, かわいそう(いずれも1),
	女	病気(16), 怪我, 事故(13), 大病(6), 辛い(5), 退屈(4), 暗い(4), 病院(4), 不安(3), 痛い(3), 悲しい(2), 暇(2), 窮屈(2), 死(2), 点滴(2), 手術(2), 孤独(2), 大変そう(2), つらい, 老人, ガン, 不自由, 苦しい, 清潔な場所, 隔離, 寂しい, 規則正しい生活, 嫌悪感, 動かない, だるい, 食事まずい, 寝泊まり, 療養, 密室, 遮断, 軟禁, 白, 病人, 検査, 拘束, 不便, かわいそう, 血, 弱そう, おおごと, 安静, 怖い, 見舞い(いずれも1),
	計	項目数(37+49=86)
入院有り	男	退屈, 暇(7), 病気(5), 病院(3), 暗い(2), 金かかる(2), いやなこと(2), 怖い(2), 医者(2), 手術(2), 気が重い, 一大事, 点滴, 寝たきり, 悪い, 忍耐力, 生命, 最悪, 不自由, 怪我, 長期療養, 二度としたくない, 面倒くさい, 大変そう, 看護婦, 食事おいしくない, ベッド, 病院食, 注射(いずれも1),
	女	病気(6), 怪我, 事故(3), 点滴(2), 症状重い(2), 暇(2), 不安(2), 痛い(2), 疎外, 孤独, 辛い, 奪われた感じ, 動けない, 縛られる, 陰気, あっさりした食事, 暗い, 白いベッド, 退屈, 束縛, 救急車, 処置, 入院, さびれ(いずれも1),
	計	項目数(29+24=53)

表2から,入院の有無により,質的に考察すると,入院した経験のある大学生は,経験からのイメージが強い。逆に,入院した経験のない大学生は,経験していない分,病気,怪我,事故などのイメージを強くもっている。量的な考察からすると,入院有り(0.91)の方が,入院無し(0.79)よりもイメージ数が多い。男女別にみると,男性において,入院有り(0.88)の方が,入院無し(0.71)よりも,また,女性において,入院有り(0.96)の方が,入院無し(0.86)よりもイメージ数が多い。さらに,入院の有無にかかわらず,女性(入院有りが0.96,入院無しが0.86,計が0.89)の方が,男性(入院有りが0.88,入院無しが0.71,計が0.78)よりもイメージ数が多い。これは,一般的に女性の方が空想力,想像力にたけていると言われていることにも一致している。

表3に患者についてのイメージを示す。

表3から,入院の有無により,質的に考察する。ここでも,入院のイメージと同様なことが言える。量的な考察からすると,入院有り(0.86)の方が,入院無し(0.61)よりもイメージ数が多い。男女別にみると,男性において,入院有り(0.73)の方が,入院無し(0.65)よりも,また,女性において,入院有り(1.04)の方が,入院無し(0.58)よりもイメージ数が多い。次に,入院有りにおいて,女性(1.04)の方が,男性(0.73)よりも,逆に,入院無しに

患者の心理に関する研究（２）

表３ 患者についてのイメージ（括弧内は延べ人数）

入院無し	男	病気（11）、弱い（4）、暗い（4）、怪我（4）、無力（2）、かわいそう（2）、入院（2）、病院（2）、悪い（2）、病人（2）、孤独感（2）、つらそう（2）、嫌い（2）、痛そう（2）、暇（2）、不健康な人、不潔、苦しい、心配、包帯、医者のお世話、点滴、寝ている、大変、年寄り、療養、退院、安静、風邪、看護婦、不自由、白い服、生死（いずれも1）、
	女	病気（11）、弱い（10）、病弱（8）、怪我、事故（6）、医者（5）、暗い（3）、不安（2）、つらい（2）、動けない（2）、苦しい（2）、悲しい、従順、不自由、余命、頑張っている人、嫌悪、通院、退屈、寂しい、パジャマ、死、怖い、可哀想、やせ細った老人、困っている、痛々しい、ガン患者、白い、薬品のおい、大変そう、制限、楽しくない（いずれも1）、
	計	項目数（34+33=67）
入院有り	男	病気（7）、弱い（4）、病人（4）、苦しんでいる人（2）、点滴（2）、車椅子（2）、怪我（2）、痛々しい苦しう、頑張してほしい、かわいそう、医療ミス、不健康、お世話になっている、悪い、退屈、しめっぽい、風邪、小さな病院、パジャマ姿、死、漫画や本が必要、見舞い、要治療、通院（いずれも1）、
	女	戦い（3）、病気（2）、不安（2）、弱者（2）、不安定、寂しい、孤独、いたわるべき存在、一人では生活できない、暇、ごはんまずい、見舞客、パジャマ、不自由、点滴、いらだち、甘え、不満、あせり、優しい人、つらい、苦しい、病院、白い、怪我、心のケア大切（いずれも1）、
	計	項目数（24+26=50）

において、男性（0.65）の方が、女性（0.58）よりもイメージ数が多い。ここでは、入院無しにおいて、男性のイメージ数が多くなっていて逆転している。男性において、入院というイメージよりは、患者というイメージの方がイメージし易かったのかもしれない。

表４に病名と人数を示す。

表４は、書きたい人だけに書かせた結果である。男性は30人（入院有りの男性の中で91%、入院有りの全体の中で52%）、女性は15人（入院有りの女性の中で60%、入院有りの全体の中で26%）、計45人（入院有りの全体の中で78%）ということで、ここでも一般的に言われているように、女性の方が男性よりも、体

が丈夫で育てやすいということである。病名もさまざまである。ここでは、病名について詳細な分析をするのではなく、人数の大体のめやすを分析しただけである。

表５に病気になったときの年齢とその人数を示す。

表５も、書きたい人にだけ書かせた結果である。男性は33人（入院有りの男性の中で100%、入院有りの全体の中で57%）、女性は26人（入院有りの女性の中で104%、入院有りの全体の中で45%）、計59人（入院有りの全体の中で102%）である。延べ人数を示しているのだから、割合にすると、100%を超える場合がある。記憶に頼っているとしても、親から聞かされているのを

表４ 病名と人数（人）

病名	男女		計
	男	女	
骨折、怪我	5	2	7
扁桃腺	4	1	5
盲腸	3	2	5
腎臓系	3	0	3
肺炎、風邪など	5	5	10
交通事故	2	1	3
喘息	1	0	1
網膜剥離	1	0	1
嘔吐下痢症	1	1	2
ヘルニア	1	0	1
靭帯	2	0	2
肝臓	1	0	1
胃	1	1	2
耳	0	1	1
歯	0	1	1

表5 病気になったときの年齢（歳）とその人数（人）

年齢	男女	男	女	計
0		0	2	2
1		1	0	1
2		1	0	1
3		2	0	2
4		2	5	7
5		1	1	2
6		1	1	2
7		1	2	3
8		2	2	4
10		3	1	4
11		1	1	2
12		3	0	3
13		2	1	3
14		1	2	3
15		3	0	3
16		1	1	2
17		3	3	6
18		3	1	4
19		2	2	4
20		0	1	1

表6 入院の期間とその人数（人）

期間	男女	男	女	計
1日		1	1	2
2日		1	1	2
3日		0	1	1
4日		0	1	1
5日		0	1	1
1週間		5	7	12
10日		3	1	4
2週間		5	4	9
3週間		0	2	2
1ヶ月		11	3	14
2ヶ月		1	1	2
6ヶ月		0	1	1
10ヶ月		1	0	1

覚えている点では、何らかの形で入院というものに対して悪いイメージをいただいているのであろう。ここでも年齢における詳細な分析は行わない。

表6に入院の期間とその人数を示す。

表6も書きたい人だけに書かせた結果である。男性は28人（入院有りの男性の中で85%，入院有りの全体の中で48%），女性は24人（入院有りの女性の中で96%，入院有りの全体の中で41%），計52人（入院有りの全体の中で90%）である。ここでも入院期間の詳細な分析は行わない。

表7に入院したときの気持ちの評定の平均を示す。

表7から、肯定的な反

表7 入院したときの気持ちの評定の平均

気持ち	男女	男	女	計
孤独感・疎外感を感じた		2.9	3.3	3.0
外界への関心の低下がみられた		2.3	2.2	2.3
ささいなことへの関心がみられた		2.8	2.9	2.9
周囲に対する不満や怒りがみられた		2.5	2.7	2.6
身体に対する不安がみられた		3.5	3.3	3.3
同調・被暗示性がみられた		2.4	2.7	2.5
支援の欲求があらわれた		3.2	3.4	3.3
心気傾向がみられた		2.1	2.5	2.3
自己中心的になった		2.4	2.8	2.6
退行現象があらわれた		2.4	2.5	2.4
疑惑心がおこった		2.2	2.3	2.3
攻撃的になった		2.2	2.1	2.2
劣等感があらわれた		2.7	2.5	2.6
神経症的反応がみられた		2.1	2.4	2.2
精神病的反応があらわれた		2.3	2.2	2.2

応がみられたのは、男性において、「身体に対する不安がみられた」である。否定的な反応は、男女において、「外界への関心の低下がみられた」、「疑惑心がおこった」、「攻撃的になった」、「神経症的反応がみられた」、「精神病的反応があらわれた」、男性において、「同調・被暗示性がみられた」、「自己中心的になった」、男性と計において、「心気傾向がみられた」、「退行現象があらわれた」である。残りは、どちらでもないである。子ども時代であり、病名もたいしたことなく、入院期間もそれほど長くない、記憶も少しうすれているという理由から、一般的に言われている気持ちはあらわれなかったであろう。

表8に認識と解決におけるタイプ別人数を示す。

表8 認識と解決におけるタイプ別人数(人)と%

タイプ別	入院有無	入院有り			入院無し		
	男女	男	女	計	男	女	計
認識+解決=すぐ実行		19人 (34%)	3人 (5%)	22人 (39%)	18人 (17%)	13人 (12%)	31人 (30%)
認識+解決できない=他人にサポートを求める		9人 (16%)	13人 (23%)	22人 (39%)	25人 (24%)	32人 (30%)	57人 (54%)
認識できない+解決=気づくことが先決		2人 (4%)	6人 (11%)	8人 (14%)	4人 (4%)	6人 (6%)	10人 (9%)
認識できない+解決できない=あきらめる(受け入れる)		2人 (4%)	2人 (4%)	4人 (8%)	4人 (4%)	3人 (3%)	7人 (7%)
計		32人 (57%)	24人 (43%)	56人 (35%)	51人 (49%)	54人 (51%)	105人 (65%)

表8から、入院無しの男女において、「認識+解決できない=他人にサポートを求める」タイプが多かったのに対し、入院有りの男性においては、「認識+解決=すぐ実行」のタイプ、入院有りの女性においては、入院無しの男女と同様である。ここからも男性の気持ちの否定的な側面が説明できるかもしれない。

以上から、仮説(1)(2)(3)は支持された。

(今後の課題)

長期入院患者と病気との関係における患者の気持ちについて、面接法を用い、ホスピスとの関連についても調べあげられれば、生死の問題にも取りかけられるであろう。

引用文献

佐藤公代 2003 患者の心理に関する研究(1) - 特発網膜剥離体験者として - 愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学 第49巻第2号 37-39

(注) 調査に回答して下さった大学生の皆様、どうも有り難うございました。

